

## ◆◆◆ 平成20（2008）年の世界・日本の年平均気温（速報）と気象の特徴

12月15日（月）、気象庁から、平成20（2008）年の世界と日本の年平均気温の速報が、発表されました。本年の世界の年平均気温の平年差\*は+0.20℃で、19世紀末の統計開始以来10番目に高い値となる見込みであること、また日本の年平均気温の平年差は+0.41℃で、13番目に高い値となる見込みであり、世界及び日本の平均気温は、依然として高い状態が続いています。

（\* 平均気温の平年差は平均気温から平年値（1971～2000年の30年間の平年値）を差し引いた値）

### 【世界の年平均気温】

2008年の世界の年平均気温（陸域における地表付近の気温と海面水温の平均）の平年差（速報値）は+0.20℃で、統計を開始した1891年以降では10番目に高い値となる見込みです。

世界の年平均気温は、長期的には100年あたり0.67℃の割合で上昇しており、特に1990年代半ば以降は高温となる年が多くなっています。特に、ユーラシア大陸の中高緯度域や北大西洋の高緯度域では、平年より気温の高い状態が続いています。

### 【日本の年平均気温】

2008年の日本の年平均気温の平年差（速報値）は+0.41℃で、統計を開始した1898年以降では13番目に高い値となる見込みです。日本の年平均気温は、長期的には100年あたり1.11℃の割合で上昇しており、特に1990年代以降、高温となる年が多く発生しています。

近年、世界と日本で高温となる年が頻出している要因としては、二酸化炭素などの温室効果ガスの増加に伴う地球温暖化の影響に、数年～数十年程度の時間規模で繰り返される自然変動が重なったものと考えられます。一方で、今年の年平均気温がここ数年に比べて低くなった要因の一つとして、2007年春から2008年春に発生したラニーニャ現象の影響が考えられます。

### 【2008年に発生した世界の主な異常気象・気象災害】

- ・中国～中央アジアの寒波（1～2月）
- ・シベリア南部～アフリカ北部の高温（3～11月）
- ・中国南部～東南アジアの大雨、台風
- ・ミャンマーのサイクロン（5月）
- ・インド北部周辺の大雨（6～9月）
- ・ウクライナの大雨（7月）
- ・アルジェリアおよびイエメンの大雨（10月）
- ・米国中西部の大雨（6月）
- ・米国南部～カリブ海諸国のハリケーン（8～9月）
- ・オーストラリア南東部の少雨（5月、10月）

### 【2008年（平成20年）の日本の天候の特徴】

- ・年平均気温は全国的に高め 年平均気温平年差は北日本+0.6℃、東日本+0.6℃、西日本+0.5℃、沖縄・奄美+0.4℃で、全国的に高かった。
- ・年降水量は東日本日本海側、北日本でかなり少ない 東日本日本海側や北日本では、冬（平成19年12月～平成20年2月）の降雪量が少なかったこと、春や秋に雨が少なかったことから、年降水量がかなり少なかった。
- ・年間日照時間は全国的に平年並 全国的に寡照の時期、多照の時期と変動が大きかったが、年を通すと平年並のところが多かった。
- ・日本海側の降雪量は少ない 2月前半までは降雪量が少なかったことから、冬の日本海側の降雪量は少なかった。特に北・東日本日本海側ではかなり少なかった。
- ・各地で局地的な大雨がたびたび発生 6月には梅雨前線により九州などで、7、8月には、上空の寒気や湿った気流などにより、各地で局地的な大雨がたびたび発生した。特に、「平成20年8月末豪雨」により、中国地方から東北地方にかけての広い範囲で家屋の浸水など大きな被害が出た。
- ・東、西日本では夏季に高温・少雨 梅雨の明けた7月には、局地的な大雨はあったものの、東日本、西日本では降水量はかなり少なく、気温もかなり高かった。
- ・地域差の大きかった梅雨入り、梅雨明け 梅雨入りは、沖縄・奄美と東北地方ではかなり遅く、東日本と西日本ではかなり早かった。梅雨明けは早いところが多かったが、北陸地方と東北南部ではかなり遅かった。
- ・台風の発生数、接近数、上陸数は何れも平年を下回る 年間の台風発生数は22個（平年26.7個）、日本への接近数は9個（平年10.8個）、上陸数は0個（平年2.6個）と、いずれも平年を下回った。沖縄・奄美地方では6個の台風が接近し、暴風雨に見舞われた。

（気象庁発表の各関連報道資料から）